



皆さんは“音訳”という活動をご存じですか。

“音訳”は、視覚障がい等の何らかの障がいで視覚からの情報を得ることが困難な方のために、印刷物に掲載されている全ての情報（活字だけではなく、図表や写真の情報）を「音声」に換えてお届けすることを目的とした活動のことです。

音訳のやりがい等については、別の記事「せせらぎの会」を御一読していただくとして、今回はせせらぎの会（岐阜県図書館の視覚障がい者サービス協力者の愛称）で、永年“音訳活動”をされている山本さんと、岐阜県図書館司書（県職員）の市川主査に音訳者になるための方法等についてお聞きしました。

〔令和5年11月2日・令和6年11月20日取材〕

音訳に興味を持った場合、「音訳技術」や「伝える能力」をどのようにして身につけたら良いのでしょうか。

【市川主査】 まずは『音訳講習会〔初級課程〕』にご参加いただき、障がい者への理解、音訳の基礎である発音や発声、アクセント、符号の読み方、辞書等による漢字の読み方の調査法、パソコンを使った録音方法等を10日間前後かけて学んでいただきます。

発音や発声、アクセントの勉強や、辞書で漢字の読み方の調査というと、新人アナウンサーの研修みたいですね。

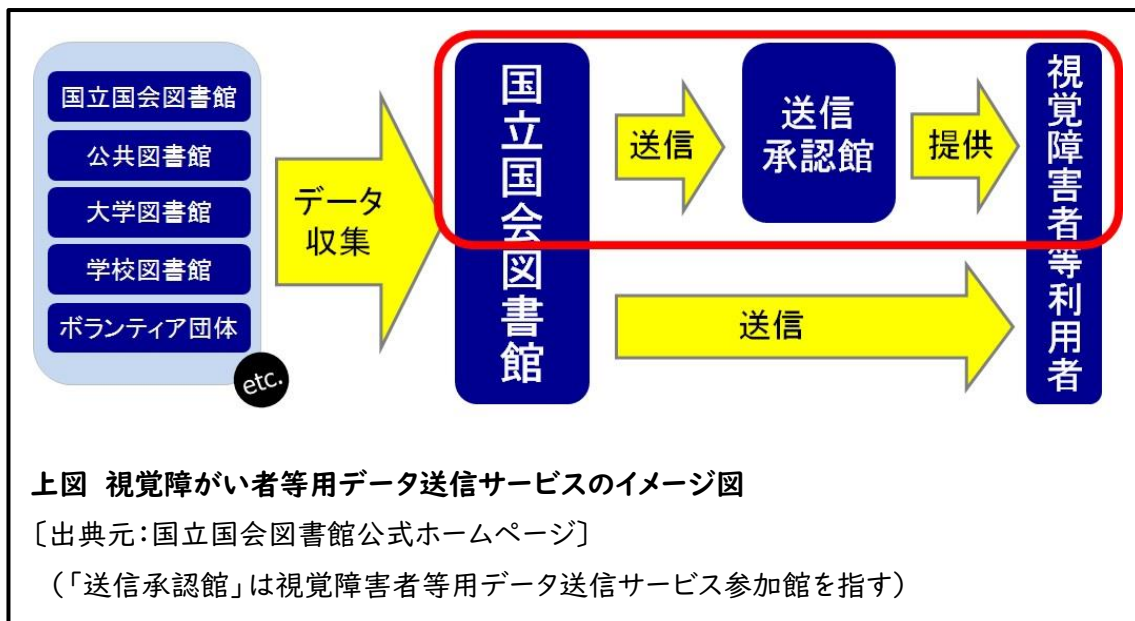
【山本さん】 せせらぎの会は、視覚障がい等のある方のために、録音室などで利用者の希望する本を読み上げる『対面読書』や『録音図書の製作』を行っています。

障がい者向けの点字本や録音図書の製作には結構な時間がかかるので、1施設で製作できる数って、どう頑張ったとしても限界がありますよね。

そこで全国の公共図書館や点字図書館等は、製作した点字本や録音図書のデータを国立国会図書館やサピエ図書館（※1）を通して、利用したい方が全国のどこからでもダウンロードできるようにしているんです。

そのため、音訳には標準語での高い技術が求められるというわけなんです。

（※1）サピエ図書館とは、日本点字図書館がシステムを管理し、全国視覚障害者情報提供施設協会が運営を行っているデータベースのこと。一定の質を担保するため、サピエ図書館にデータを収めるには、いくつかの登録基準を満たす必要がある。



岐阜の方言は語尾が関西寄りの訛りはあるものの、イントネーションの面では癖がない気がするので、標準語への矯正は比較的楽なのではないでしょうか。

【山本さん】 いいえ。そう思われている方は多いんですが、岐阜弁のイントネーションも相当訛っていますよ（笑）

受講前はみな自分では標準語を話しているつもりでいるけど、実はちょっと違っていったってことに気づくんです。

例えば、標準語で「こと」は、続く助詞の前で音が下がる「尾高型」というのですが、岐阜弁では一音目の「こ」が高くて、そのあとの「と」で下がる傾向があります。「もの」なんかも同じ傾向にあります。

人によっては、助詞があがる癖のある方もいらっしゃいますし、こういった細かい言葉のアクセントは直そうと思っても長年身についてしまっているものだから、直すのは難しいし、思う以上に大変なんですよ。

録音作業というと、歌手がレコーディングする時には、録音室の外に控えている音楽監督や音声編集担当者の指示を受け、録音室でマイクに向かって何テイクも歌いますよね。

でも、音訳では、自分で録音作業をやらないといけないのですか。

【山本さん】 慣れない間は先輩音訳者や図書館の職員さんが補助をしますが、基本的には一人で録音作業をし、後日、その録音されたデータを校正担当者が確認するというシステムになっています。

【市川主査】 音声データはサピエ図書館の図書製作支援システムで保存・管理しているので、自前のパソコンがあれば、録音マイクを借りて自宅で作業することもできますよ。



上写真 録音編集作業中の様子

入念な下読みと読みの調査の後、録音担当者は録音室で、一人マイクに向かいます。

録音したデータはパソコンに取り込まれ、録音者自身がその場で音声の波形等を確認し、録り直しの判断をします。

録音が終わったデータはサピエ上に保存・管理することで、リアルタイムで別の場所にいる校正担当者に引継ぐこともできます。

録音作業って、難しいですか？

【市川主査】『音訳講習会[初級課程]』では、パソコンや周辺機器のセッティングから、録音ソフトの使い方、ファイル名の付け方等に至るまで、パソコン操作に不慣れな方でもつまずきがないよう一つ一つ丁寧に教えているので大丈夫ですよ。

【山本さん】録音作業というと、私が音訳を始めた当初はカセットテープに録音していたのですが、今ではパソコンを利用して行っています。

カセットテープ時代に録音を訂正する時は、修正前の言葉の長さと同じ長さで上書きをする必要があって、その調整が難しくて、録り直しはとても大変な作業でした。

それと比べると、パソコンを使っでの作業は音の波形を見ることができるし、音声を削除することや修正前とは違う尺での言葉の差し込みも可能なので、パソコン操作に慣れてしまえば、簡単ですよ。

『音訳講習会[初級課程]』を終えた方は、どれくらいの頻度で、どのようなことを担当しているでしょうか。

【山本さん】まず録音図書の製作には、『原稿の下読み』、『読みの調査』、『録音』、『校正』、『DAISY(※2)編集』、『DAISY 編集チェック』といった工程があって、初級の方は、比較的録音時間が短い新聞や雑誌の『録音』までを担当します。

働きながら活動に参加をしてくださっている方もいらっしゃるので、活動のペースについては自分で決められるようになっています。

【市川主査】因みに音訳者さんたちが製作した録音図書のデータは、当館では月に1回まとめて国立国会図書館視覚障害者等用データ送信サービスに登録を依頼してい

ます。全国の利用者の方に聞いていただけますので、やりがいがあるのではない
でしょうか。

(※2) ^{ディジー}DAISY (Digital Accessible Information System) とは、視覚障がいなどで活
字による認識が困難な方のために製作されるアクセシブルなデジタル図書の国際基準
規格。読みたい場所への頭出しや再生スピードの変更などが可能。

次に、初級課程修了後の音訳活動について教えてください。

『音訳講習会〔初級課程〕』後、フォローアップ研修等がありますか。

【市川主査】 近年は、3年を1サイクルとして、『音訳講習会〔初級課程〕』、『音訳講習会〔中
級課程〕』、『音訳講習会〔校正課程〕』を順に開催しています。

『音訳講習会〔中級課程〕』では、発声・発音、ピッチ、アクセントも再度習います
が、新たに写真・イラスト・地図の読み方、マンガ・料理のレシピの読み方等、1冊
の本を録音図書にするための知識や技術を学びます。

また、『音訳講習会〔校正課程〕』では校正の目的や基本、校正の方法、校正表
の記入といった校正技術について学びます。

【山本さん】 他には、月に1回せせらぎの会の全員を対象とした『研修会』や、毎月第1木曜
日には、DAISY 編集者を対象とした『^{ディジー}DAISY勉強会』も実施しています。

昔は鍵括弧(「 」)内を読む時にはその前後に間をあける様に習いましたが、
最近の講習では内容にもよりますがそこまでしなくてよいと言われていましたし、音
訳や校正の基準も年々変わっています。そのため、ずっと勉強を続ける必要があ
るんですよ。

録音図書の完成までの所要時間は、書籍の分野や頁数等によってまちまちですね？

**月ごとに音訳当番を受け持つというわけにもいかないと思うのですが、中級以上の方はどの
ように分担をされているのでしょうか。**

【山本さん】 県図書館に利用者から「この本を音訳して欲しい。」というリクエストが入ると、
図書館館から担当者募集があり、その時に余裕のある方が『録音』をはじめ各
担当を引き受けています。

【市川主査】 初級課程を受講されたばかりの方のサポートや、『音訳講習会』での講師役・サ
ポート役といった後進育成についても、ベテランの方々が担当してくださっている
んですよ。



上写真 令和 6 年度『音訳講習会
〔初級課程〕』の様子

令和 6 年度『音訳講習会〔初級課程〕』は R6.9.18~R6.11.27 に全 11 回で開催され、15 名の参加がありました。そこでは、山本さん（写真中央）をはじめとするベテラン音訳者さんがサポート役となり、参加者に 1 つ 1 つ丁寧に教えてもらっていました。

せせらぎの会の今後の課題はありますか。

【山本さん】 せせらぎの会の仲間を増やすことです。

【市川主査】 その対策として、『音訳講習会〔初級課程〕』とは別に、様々な機会でも録音図書や音訳について積極的に紹介しています。

それと…県図書館としては、音訳者さん達が頑張ってくださっているので、『録音図書』の利用者を増やしたいと思っています。

もっと多くの方に録音図書の存在を知ってもらい、利用していただくために、見えない、見えにくいの方のためのサービスとせせらぎの会の活動を紹介するチラシを作成し、県眼科医会や県めがね組合に依頼して、所属クリニックや店舗に設置を依頼しています。

近年、音訳者の新しいなり手が少ないのは何故でしょうか。

【市川主査】 前回、令和 3 年度の『音訳講習会〔初級課程〕』には 11 名が参加し、9 名のボランティア登録がありました。また今年度（令和 6 年度）の『音訳講習会〔初級課程〕』には 15 名の参加者がありましたが、定員の 20 名には至りませんでした。

講習会の受講はゴールではなく、活動のスタートです。技術を積み重ねていく必要があるのも、難しそうだと感じる方もいるかもしれません。まだまだ“音訳”自体の知名度が低いのも原因かもしれませんね。

【山本さん】 私が活動を始めた頃は、ひと月に 1 回、新聞の録音の当番がまわってきて、当番の週は火曜日の朝に県図書館に行き、午前中に下読み、読みの調査を終え、その日の午後には通して読んで、翌日水曜日に校正していただき、その週中に直しをするという流れで、本当にへとへとでした。

でも、先程もお話をしましたが、今では活動のペースは自分で決めることができます。

それに、コロナ禍以降は自宅で録音や校正ができる体制が整えられ、わざわざ図書館に行く手間や、録音室の予約の順番を待つ必要がない分、以前より時間的ハードルが下がっていると思うんです。

このような点をチラシだけではなく、上手に SNS を使って周知していくことで、社会全体に認知していただけるといいなと思います。

どのような方が“音訳者”に向いていると思われますか？

【山本さん】 根拠を持って正しく読むには、『読みの調査』をしっかりとしなければなりません。いくら、地名や人名等の読みの調査をどれだけ念入りにしたとしても、時には間違えることもあるんです。後から間違っていると指摘をうけることも。

なので、「調べ方を工夫できる方」が向いているかな？

【市川主査】 音訳者の皆さんは、辞書類で調べても見つからない場合は、YouTube や画像検索などインターネットも活用されていますよね？

【山本さん】 ええ、色々な方法で調べています。

うーん、そうですね…例えば、歌詞が書かれた本に漢字で「明日」と書かれていた場合に「あす」と読むのか、「あした」と読むのかといった場合、歌を聴かないと正解は分かりませんよね。

音訳の工程の中で、この『読みの調査』が一番労力を大きく占めているので、こういった調べ物が苦ではないこと、また周りの人と協力できる力、校正されたことを素直に受け入れられる心が求められると思います。

【市川主査】 音訳には技術や知識が必要ですし、継続して活動してくださる方ともなると、想像以上にやる気や根気が必要になるので、別のボランティアと比較するとハードルが高い方かもしれませんね。

それでも、活動の意義ややりがいは大いだと思います。“音訳者”の手助けを必要とされている方が大勢いらっしゃるのので、“音訳者”になってくださる方が増えるといいなと思います。